

書 評

王汎森ほか著『重返《国史大綱》：
錢穆与当代史学家的對話』

饒 佳 榮

Book Review

Co-authored by Wang Fan-sen et al. *Returning to Guo Shi Da Gang: Dialogues between Qian Mu and Contemporary Historians*,
The Commercial Press, Ltd., Taipei, Taiwan, 2023

RAO Jiarong

—

本書は二十世紀中国の著名な歴史家である錢穆（1895～1990）に関する最新の論集であり、2023年7月、台湾の商務印書館から出版された。一般の読者をターゲットに含むため、本格的な論文集ではなく、個別の論文を除いて脚注が少なくなっている。全体は二つの部分に分かれ、計一二篇の論考が収録される。

三年前の2020年は、錢穆の逝去から三十年目に当たる。この節目の年に学術界では、錢穆を研究対象とした論文が集められ、翌年『重訪錢穆』（上下冊、台北：秀威資訊）として出版された。ここでは、中国大陸、台湾、香港、アメリカの六十人の学者によって錢穆に関する様々な側面が取り上げられた。

それに対し、本書の執筆者はすべて台湾で勤務している学者であり、テーマは比較的集中的で、錢穆の『国史大綱』の解釈に焦点が当てられている。

『国史大綱』（以下、『大綱』と略す）は錢穆の代表的な著作の一つといえる。この書は日中戦争が勃発した後、錢穆が1930年代前半に北京大学で行った「中国通史」の講義をもとに執筆されたものである。初版は1940年に上海の商務印書館から上梓されたが、その後、何度も加筆や修訂が行われ、さまざまな版が発行され、大きな影響力を持ってきた。この書は、かつて香港、マカオ、台湾の高等教育機関で歴史教科書として使用され、多くの学生たちに対して啓蒙の役割を果たした。実際、台湾の中国通史の授業において、今日でも『大綱』の影響が見られる。

中国大陸でも読みつがれ、現在では、北京、台湾、香港の商務印書館がそれぞれ独自のバージョンを発行している。つまり、『大綱』は学界と一般読者の間でほぼ古典的な書物と見なされているのである。

本書評では、まず各章の内容を紹介し、ついで論評を加えてみたい。

二

第一部分「錢穆的思想世界」には七篇の論文が含まれる。主に錢穆の学問的な経緯に焦点を当て、全体として『国史大綱』の意義を把握することに重点を置いている。この部分の構成は次の通り。

歴史時間は延続的嗎？ — 錢穆与民国學術（王汎森）

需要一種新的国史 — 錢穆与『国史大綱』（王健文）

開放性思考的歴史叙事 — 『国史大綱』与通史精神（閻鴻中）

如何閱讀『国史大綱』 — 經典・学説・史料（遊逸飛）

情的融合？ — 『国史大綱』与域外思想（孔令偉）

士之自覚 — 能働性問題与現代中国思想史中的『国史大綱』（徐兆安）

錢穆与余英時（王汎森）

このうち第一篇と第七篇は王汎森が執筆したものである。王氏は余英時に師事し、余氏は錢穆に師事したため、王氏は錢穆の再伝の弟子である。実際に、王氏は十数年前に「錢穆与民国学風¹⁾」という論考を発表しており、本書の二つの文章と合わせて読めば有益だろう。初めの「歴史時間は延続的嗎？」（以下、「歴史時間」を略す）では、錢穆の『大綱』の執筆が民国時代の七つの学術思想的テーマに関連していることを論じている。それらのテーマは以下の通りである。①地方の新知識人、②一九三〇年代の三つの歴史観（すなわち『大綱』序論における三つの学派の歴史的思考）、③歴史を評価する視角（中国の外部あるいは内部からの視角）、④文明的または文化的態度、⑤新しい通史、⑥歴史時間は連続的か断裂的か、⑦中国歴史の「本質」。王汎森によると、錢穆は、中国の歴史が独自の特異性を持ち、中国文化と西洋文化が異なることを認識しており、したがって中国の内部からその歴史の変遷を観察する視点を取り、西洋の視点で中国史を評価することはできないと考えていたという。

王健文「需要一種新的国史」は、主に民族国家の視点から『大綱』の創作とその意義を探究している。論考は近代中国の「新史学」運動を軸にしており、歴史の記述と民族国家の形成との関係に焦点を当てている。また、『大綱』がどのように意義的危機や技術的危機を乗り越え、新たな通史を生み出したのかについても述べている。そして、錢穆が「地理的空間、文化的分

1) 王汎森（2010）に収録された。

野、知識人のアイデンティティの多重な辺縁に存在する」と指摘し、「時流に逆らった文化的な保守者である」と強調している（55頁）。さらに、一方では余英時の「一生為故国招魂（一生を通じて祖国のために魂を呼びもどす）」という言葉を用いし、錢穆の歴史学の意義を解釈し、他方では『大綱』の「未来の予言書」としての性格を指摘している。これは偶然ながらも、先に述べた王汎森の論考の結末で描かれた「歴史の新たな天使」のポーズ（体は前へ、頭は後ろを向いている）と相まっている（36-37頁）。

王健文が「国史」に焦点を当てているとすれば、閻鴻中「開放性思考的歴史叙事」は「通史」に重点を置いている。もちろん、この論考でも「国史」に触れられている。閻氏は、近代中国における「通史」（古代から現代に受け継がれてきた歴史）と「国史」（民族国家の歴史）の経緯を整理し、傅斯年や錢穆などが歴史知識の客観性を優先してきたと指摘している。そのうえで、近代中国で流行していた代表的な通史作品を挙げ、それらが共通の傾向を持っているという。さらに、『大綱』の「国史」の概念に特に着目している。閻氏によると、『大綱』は二つの特徴を持ち、まずは伝統的な歴史学を肯定することであり、次に歴史と現実の結びつきを強調することである。それによって、『大綱』は「現実中の多くの重大で困難な問題に対応している」とされている（106-107頁）。そして、歴史上の政体の進化や各王朝における開国の状況などを通じて、錢穆が中国の政治的な難問をどのように取り扱っているかについて論じている。

游逸飛の論考「如何閲読『国史大綱』— 經典・学説・史料」は、副題が示す通り、三つの側面、つまり『大綱』の通史カリキュラムに与えた影響、それが包含する諸学者の見解、そして引用されている史料から、錢穆のこの著書の価値を論じている。まず、台北大学と東華大学の中国通史のカリキュラムを例に挙げ、『大綱』が現在もなお生命力と影響力を持っていることを確認している。そのうえで、「士人政府論」は錢穆の穏やかな歴史論説である一方、「中国式民主」は激しい政治的議論であると主張している（156頁）。そして、游氏はおおむね『大綱』が基本的には士人政府を軸に中国政治史の進展を論じていると考えている。史料の面では、『大綱』は主に正史に基づいているが、正史以外の文献も大いに参考にしていることを指摘している（163頁）。

本書では、二つの論考が疑問符をタイトルに使用している。一つはすでに紹介した王汎森の「歴史時間延続的嗎？」であり、もう一つは孔令偉の論考「情的融合？」である。ただし、前者の疑問符が錢穆に対する疑問ではないのに対し、後者はむしろ批判的な意味あいを持っている。孔氏の論文では、近代中国の歴史学界における「域外思想」（中国以外の地域に対する観念）を検討したうえで、錢穆が中国史における「域外」をどのように扱っているかを論じている。最後に、「中国」と「域外」の二項対立を超え、国家・民族主義的な歴史観を乗り越え、ユーラシア史や、海洋史、グローバル史などの視点から中国と世界の関係を探究することを提案している。

この論考の中で興味深いのは、孔氏の錢穆のいう三つの学派に対する理解である。まず、孔

氏は柳詒徵や呂思勉などは伝統派・記誦派に属し、錢穆自身も大まかにこの学派に属している
と述べている。彼らは秦の統一以前にはいわゆる域外の問題は存在しないと一般的に考えてい
るという。次に、翦伯贊や白寿彝などは革新派・宣伝派に属し、この学派は「自古論」（中華民
族が古代から形成されてきたという説）や「共創論」（中国は多くの民族によって共同で創造さ
れたものであるという説）を唱えていたとする。さらに、科学派・考訂派に属する傅斯年や陳
寅恪などがおり、彼らは「虜学」と呼ばれる学問によって乾嘉漢学の伝統を超えることを志し、
多言語の比較文献学的手法を用いて中国の歴史を研究しているという（181-183頁）。

また、孔氏は、『大綱』が中国と域外の認識を対立的に捉えていることを指摘している。つま
り、中国は平和で統一的であるのに対し、域外の異民族は分裂や暴力をもたらすと見る。だが、
周辺の諸民族と華夏が長い歴史の中で「情の融合」を経て、最終的に現代中国が形成されたと
『大綱』は主張する。しかし、孔氏はこの点で、前漢と匈奴、後漢と羌、清朝とジュン＝ガル
＝ハン国の緊張と暴力を例に挙げ、「情の融合」論を批判している。

徐兆安「士之自覚」は、「能動性の問題」によって、現代中国の思想史における『大綱』の意
義を捉えようとしている。徐氏は、錢穆の「士人を中心とする歴史観」が歴史解釈に関わる様々
な問題と関連していると指摘している。特に『大綱』の第三十二章「士大夫の自覚と政治革新
運動」を選び、他の章との異質を強調している（217頁）。徐氏によれば、『大綱』のほとんどの
章は経学者や理学者の思考方法を取り入れているが、「士の自覚」は錢穆という歴史家の「超歴
史的」側面を反映している。「超歴史」とは、歴史の中に存在しながら歴史にとらわれず、逆に
歴史の潮流を変える力を探求するという意味である（223頁）。そして、清末から民国時代にか
けての「士の自覚」につき、胡適や陳独秀、傅斯年、孫文主義の「自覚」との対比を通して、
錢穆の民族主義は「喜悲交集の文化復興観」であるとする（242頁）。

王汎森の「錢穆与余英時」は系統的な専門研究ではなく、その個人的な理解に基づく論考で
ある。まず、王氏は胡適、錢穆、楊聯陞の三人が余英時に最も大きな影響を与えたと指摘して
いる。胡適は文化・政治の全体的な方向で、錢穆は学問の面で、楊聯陞は職業的なキャリアで、
それぞれ非常に影響を及ぼしたとされている（253頁）。また、当該論文では、余英時の職業選
択に関する錢穆と余氏自身の考え（アメリカの大学に留まるか、新亜書院に戻るか）や学問の
理念の違いも検証している。さらに、王氏は、錢穆と余英時は異なる世代の立派な歴史学者で
あり、二人の間には完全に一致しない志向があると述べている。錢穆は伝統的な「道学」の理
想が強く持っており、余英時は現代の学术界に身を置き、現代の学術規範に従い、客観性を追
求する現代史家であると主張している（268頁）。

第二部分『『国史大綱』的歴史世界』には五篇の論文が含まれる。基本的に、各執筆者はその
分野の最新の研究状況や動向を紹介し、それを『大綱』の見解と対比させることで、一種の「対
話」を生み出している。この部分の構成は次の通り。

従文献中抽繹時代精神——『国史大綱』的上古史（高震寰）

大時代的氣運盛衰——『国史大綱』的中古史（傅揚）

立足于社会治理——『国史大綱』中古代至中古的宗教（許凱翔）

以政治為走向的書写——『国史大綱』的宋元史（鄭丞良）

專制下的經濟与學術——『国史大綱』的明清史（丘文豪）

高震寰「從文献中抽繹時代精神」は、まず『大綱』が中国という国家の歴史を重視するのに対し、現代の学者たちの通史では中国と外部地域の連携的な発展、また世界文明の一部としての中国の位置と意義を強調していると指摘している。高氏は『大綱』の上古史の部分について、先史時代から殷商時代に至る段階の記述は、1940年代までの資料の制約により不十分なところがあると述べるが、西周以降の叙述は今でも参考価値があるという（299頁）。さらに近年、新資料が大量に出土したことにより、先秦・秦漢史の研究には多くの手がかりが提供されていると述べている。例えば、秦の政治については、『大綱』の執筆の時代には確かに「詳細に言及できなかった」が、現在では様々な秦の簡牘が次々と公開され、秦史の様相が大きく変わってきた。また、漢代の歴史研究においても簡牘、墓葬、碑刻、器物などの資料の利用が重視されており、伝世文献に限らず、人類学や考古学などもほぼ必須の要件となっているという。

傅揚「大時代的氣運盛衰」は『大綱』の中古史（中世史）の部分、すなわち魏晉南北朝、隋唐時代の歴史について論じているが、同書では「中古」という概念は採用されていない。傅氏は、『大綱』が最も関心を持っているのは各時代の人々が理想的な国家と社会の関係を追求した点であり（307頁）、それは中世においても同様であると論じている。したがって、傅氏は君主、士人、庶民の三者の相互作用に注目し、『大綱』に描かれた中世時代の制度とその精神を探求している。『大綱』では、均田制・租庸調制、府兵制、三省制、科挙制の四つの制度に特に注意を払っている。錢穆の見解によれば、これらの制度は「合理的な概念と理想」を反映したものである。また、傅氏は錢穆の魏晉南北朝と隋唐に対する態度はまったく対照的であり、すなわち前者が暗黒の時代であるのに対し、後者は光明の時代であると評価しているという（323頁）。

許凱翔「立足于社会治理」は、『大綱』における古代から中古時代にかけての宗教について論じているが、これは『大綱』が特に注力しているテーマではないようだ。論文ではまず、宗教の定義から始まり、錢穆の「宗教」の特質が折衷的であると指摘している。この「宗教」は、一方では中国の伝統的な「教」という意味であり、すなわち現実の政治に密接に関連する思想や学説を指し、同時に西洋の religion の意味も取り入れているとされている。ただし、錢穆の関心はやはり政治と関連性の高い宗教に向けられており、例えば祠神信仰はその考察からほとんど除外されていると指摘している（342頁）。許氏によれば、錢穆が宗教を評価する際、大まかに二つの基準が存在すると述べている。一つは宗教の「大衆」に対する関心の度合いであり、もう一つは宗教が現実の世界に貢献するかどうかということである。その結果、錢穆の宗教に関する論述の比重は時代によって大きく異なることが示されている。例えば、魏晉時代の道教を論じる際には、政治と関連する部分に重点が置かれ、道教の内面的変化についてはほとんど

触れられていない。南北朝時代の宗教については、北朝を重視し南朝を軽視している。隋唐時代においては、仏教の禪宗を重視し道教を軽視している。また、中世時代に広く普及した浄土思想についてもほとんど言及されていない。つまり、錢穆の儒家本位の特徴をよく反映しているとされている（346、347頁）。

鄭丞良「以政治為走向的書寫」は、『大綱』における宋元政治史のいくつかの議題に対する見解と、現代の学界の視点を比較することによって、この分野の動向を考察している。これらの論点は重要であり、論争が絶えず、学界でもよく知られている。たとえば鄭氏は、清代の学者である趙翼の『廿二史劄記』が、『大綱』における宋代の「積貧積弱」説の重要な出典である可能性を指摘している（372頁）。また、この「積貧積弱」説は少なくとも国家の財政と民衆の負担という二つの観点から解釈できると述べており、それは錢穆が「上下俱足」（国家の繁栄と民衆の富足）という理想社会に対する期待を反映しているとする。さらに、宋代の「相権低落」説は内藤湖南が唱えた「唐宋変革論」の「君主独裁」とは同一視しえないとし、単純に権力分散の視点から「相権低落」を論じることは史実に合致せず、より詳細な検討が必要であると強調している（378、380頁）。また、元代の行省制度に関しては、李治安や蕭啓慶の研究を引用し、行省が中央と地方の二重性を持ち、「分権に見えて実は統制がある」という点で『大綱』の論述と基本的に一致しているという（382-383頁）。そして、「九儒十丐」の説は南宋の滅亡に対する失望感を大まかに反映しているが、元代の社会の実情ではないと述べている（384-385頁）。最後に、制度、儒者、理想社会の三つが錢穆が最も重視する要素であると指摘している。

丘文豪「専制下的經濟与學術」も傅揚と同様に、『大綱』の時代区分に注目している。『大綱』では「元明之部」と「清代之部」を設けており、「明清史」という用語は採用していない。丘氏は、錢穆の明清史を理解するためには、『大綱』だけでなく、『中国近三百年學術史』や『中国歴代政治得失』など他の書籍も総合的に考慮する必要があるという。また丘氏は、通史の視点から明清史を考察することを重視しており、中国の政治が専制的であるかどうか、そして経済地理と學術思想に関わる問題を特に論じている。丘氏は、錢穆が中国史を考察する際の基本原則は、中国自身の基準によってその政治と文化を理解することであり、したがって錢氏は専制を中国政治の本質や常態と見なすことには同意していなかったと見る（388-389頁）。さらに、南北の経済重心の移動と學術思想の興隆と衰退に関する錢穆の理論を概説している。

三

紙幅の制約があるため、論評として三つの要点に絞ってコメントしたい。

（一）本書のテーマの設定

全体的に、本書の内容は非常に豊富であり、『大綱』の読解に大いに示唆を与えてくれる。本

書を読んだ後、筆者も『大綱』を再読し、その学問と見識に感服しつつも、時代的な制約というものを強く感じた。個人的には、孔令偉の「域外思想」へのアプローチや許凱翔の「宗教」に焦点を当てた『大綱』の解説は新鮮で、知的刺激に富んでいる。しかし、『大綱』そのものに関する限り、少なくとも三つの議題がとりわけ議論に値すると思われるが、結局実行されなかったようである。これには様々な理由があるが、結果的に残念なことである。その三つの議題は、制度史、経済史、そして歴史地理である。

錢穆は高弟の嚴耕望に宛てた書簡の中で、『大綱』執筆の重点について次のように説明したことがある。

拙著（『国史大綱』を指す—引用者）側重上面政治、更重制度方面；下面社会、更重經濟方面；中間注重士人参政、于歷代選挙考試及時代士風、頗亦注意²⁾。

すなわち、『大綱』の中心のかつ特徴的な論述は、制度史、経済史、および士人政治であり、これらに焦点を当てたという。また、錢穆が回想するところによれば、みずからの師であり著名な歴史学者である呂思勉は、『大綱』の「南北經濟論」を「千載隻眼」（たぐい稀な識見）と評価したという³⁾。

本書では、第三の側面である士人政府論（または君・士・民の相互作用論）については何人かの研究者が扱っているものの、制度史や経済史については踏み込んだ分析や説得力のある判断が欠けているようである。これは、本書が想定している読者と関連しているかもしれない。

さらに、鄭丞良や丘文豪らは歴史地理についていくらか触れているが、その展開は十分なものとは言い難い。実際に、錢穆は歴史地理に強い関心を持ち、専門的な研究も行っていた。『大綱』には手書きの地図が多数添えられていることから、錢氏が地理を重視していることが窺える。もしこのような視点から『大綱』を点検するなら、興味深い問題がさらに見つかる可能性があるだろう。

（二）『大綱』に影響を与えた論説と『大綱』の影響

通史を著す際には、既存の研究を十分参照し、それらを活用する必要がある。余英時によれば、『大綱』は当時の学界の成果を吸収するだけでなく、しばしば応用しつつ議論していると論じている。特に、王国維、陳寅恪、周一良らの業績を具体的に挙げている。そして、余氏は『大綱』を「現代中国史学の全盛期の結晶」と評している⁴⁾。

本書では、この点についてさらに探究が行われている。例えば、王汎森の論考「歴史時間」

2) 錢穆（1998b：391）。

3) 錢穆（1998a：53）。

4) 余英時（2016：9、11）。

では、『大綱』における龍山文化と仰韶文化の関係についての記述は、梁思永の「後岡三重層」という研究成果を参照していることが指摘されている(29頁)。同様に、閻鴻中は、『大綱』が傅斯年の見解を援用し、西周封建を侵略的な武装植民と軍事的占領であったことを示している(117頁)。さらに游逸飛は、『大綱』の1995年の改訂版における女真に関する一節は、藍文徴が1953年に発表した論文「海上の女真」を参考に行っていることを論じている(156-158頁)。

一方、『大綱』は後続の研究者たちに対して様々な刺激を与え続けた。傅揚は、いくつかの例を挙げて、学界の一部の研究が錢穆の見解に直接的または間接的に関連していることを示している。例えば、甘懷真の「二重君主観」、余英時の漢末の南北分裂に関する考察、嚴耕望の隋の財富についての探求、孫国棟の唐の三省制に関する研究などが挙げられている(317-319頁)。このような例は少なくないであろう。

(三) いくつかの細かな問題

本書の執筆者たちは、それぞれ異なる分野を専門としているため、錢穆の学問的思想に対する理解も多様であり、時には全く対照的な判断を示すこともある。例えば、『大綱』の引論部分で述べられている三つの学派については非常に注目され、『大綱』の刊行される前に新聞に掲載されて以来、大きな論争を引き起こしてきた。王汎森の「歴史時間」では、錢穆は自らを「記誦派」には属しないと捉えているのに対し(19頁)、孔令偉は錢穆が「記誦派」に属すると明確に主張している(173頁)。また、王汎森(19頁)、王健文(41、64頁)、閻鴻中(91頁)は、錢穆と胡適、傅斯年などの考訂派との隔たりと対立を強調しているが、孔令偉は錢穆が述べている三派は相い対立するではなく、互いに重なり合っていると強調している(183-184頁)。確かに孔氏のこの意見には一理があるものの、彼が錢穆を「記誦派」と位置づけるのは、錢氏の本意ではないようである。実際、『大綱』の引論では三派に対して批判的な態度を持っていると見受けられる。

さらに、孔氏は陳寅恪を科学派の一員として扱っているが(180頁)、陳氏自身も錢穆もおそらく同意しないだろう。なぜなら、陳氏は科学派(特に胡適の「整理国故運動」)に対して批判的な立場をとっていたからだ。陳氏は伝統を尊重する点では錢穆に似ており、学問を追求する姿勢では傅斯年に近いとされるが、その学術的思想は複雑である。

ちなみに、孔氏は「錢穆は元朝の歴史に詳しいが、モンゴルの歴史についてはそれほど詳しくないかもしれない」と指摘しているが(200頁)、これは錢穆の元史やモンゴル史に対する研究レベルを過大評価しているのではあるまいか。もちろん、『大綱』を他の中国通史の元史部分と比較すれば、その分野に対する錢穆の熟知度がより明確になるかもしれない。

このほか、本書にはいくつかの誤植が見られる。まず、王汎森は周一良の論文「論宇文泰の種族」(27頁)に言及しているが、実際には「宇文泰」ではなく「宇文周」のはずである。一方、游逸飛と孔令偉も周氏のこの論文に言及しているが、篇名は正しく記している。また、丘

文豪は文中で二回にわたって錢穆の著書『中国學術思想史論叢』に言及しているが、どちらの場合も誤って「『中国思想論叢』」（410頁）、「『中国思想史論叢』」（413頁）と記載している。

四

最後に注意すべき点は、錢穆の『大綱』は確かに古典的な著作であるが、その古典性はある程度、学术界、教育界、出版界の共同の努力の結果であるということである。また、『大綱』は近代中国の国民国家形成期と日中戦争期に著されたものであり、その歴史観には儒教、大一統、士人が中心に据えられている。しかし、現代の視点から見ると、さまざまな欠陥や欠点があるのは致し方のないところである。本書の執筆者たちは、『大綱』の古典性を維持しようと努力しており、批判的な表現もわりあい婉曲的であるが、全体を通して『大綱』の限界が際立つ結果になっているように思われる。さらに、日本の中国通史と比べると、中国大陆と台湾の中国通史にはかなりの改善の余地があると考えられる。もう少し具体的に言えば、日本における中国通史は基本的に途切れることがなく執筆され、版を重ねており、時代に応じた日本の中国史研究の最先端を反映している。一方、中国大陆と台湾における中国通史の執筆は満足のものではない。特に中国大陆では、中国史研究においては多くの成果が上がっているが、中国通史の執筆は明らかに遅れており、学界の新たな理解や思想を反映することが難しい状況である。この点で、日本の中国通史の執筆は示唆に富み、中国大陆と台湾における中国通史の参考になるだろう。激変のこの時代において、中国通史を書き直すことは必要不可欠である。『大綱』の知見を吸収しつつ、その枠にとらわれずに新たな著述を創造することが求められるのである。

（新北：台湾商務印書館、2023年7月、A5判、416頁）

参考文献

錢穆（1998a）『八十憶双親師友雜憶合刊』台北：聯經出版

錢穆（1998b）『素書樓餘渾』台北：聯經出版

王汎森（2010）『近代中国的史家与史学』上海：復旦大学出版社

余英時（2016）「『国史大綱』發微——從內在結構到外在影響」、『古今論衡』第29期（2016年12月）：3-16

